

思いやりのある生徒

確かな学力をもつ生徒

心身ともにたくましい生徒



とうだい

平戸市立



生月中学校

自信と誇りもて歩め

つながりが生む文化



先週金曜日、秋晴れの穏やかな日に「生月文化の日」が開催されました。生徒会によるオープニングの後、各学年の発表が行われました。1年生は、フィールドワークで知った生月の戦跡と史実を劇「生月砲台と子どもたち」に仕立て上げました。戦中、砲台を作る過程で海砂利を運ばされた子どもたちの姿と現代の子どもたちの生活が重ねられ、原爆や特攻、沖縄戦などだけでなく、身近なところに戦争を伝えるものはあり、8月だけの平和学習にとどめてはいけないというメッセージを伝えました。戦後80年の今年、このような発表ができたことは大きな意味があることでした。



2年生の「職場体験を終えて」は、7月に行った職場体験学習の様子を伝えるものでした。再び事業所の協力を得て、実際の衣装を身に着けて、ユーモアを交えて演技し、次々と場面転換する有様は、スビード感のある昨今のコンテンツさながらでした。タレントが多く、その特性を見抜いて（AEDの音声まで！）作り上げていたのはさすがでした。今年は、大道具・小道具や背景などにも力が入っていたと保護者の感想の中にもあったのですが、巨大なマグロはその代表格であったのは間違いないと思います。



3年生は「Memories of 3days」と題して、修学旅行のエピソードと学んだことを披露しました。大分の「うみたまご」のバスの降車からセイウチやイルカまで登場する賑やかな場面から一転、菊池恵楓園でのハンセン病に関わる差別の歴史を真剣なトーンで描きました。そして、最後は、太宰府で菅原道真公も飛び出し、合格祈願で幕を閉じました。保護者感想には、ハンセン病のことが分かって良かったというものもあり、3年生らしく、楽しさの中に重みもある発表だったと思います。



続く学年発表では、1年生が、まだ固まり切れてないものの、その分フレッシュで元気な声を届けてくれました。来年、再来年が楽しみにするような歌声でした。2年生は、女声パートのアカペラで始まる「証」を披露。パートが一体となった時、思春期を過ごす中学生の思いがあふれるほど伝わってきました。最後の3年生は、「友々旅立ちの時」で、卒業式の歌のように感じた保護者もいたようです。その印象の通り、かみしめるような表情でステージを降りてくる3年生の姿が歌声とともに心に残りました。



閉会式の前には、翌日にイングリッシュピッチコンテストを控えた、3年生松本□□さんと1年生森□□さんの発表がありました。どちらも生月愛あふれる立派なスピーチでした。（当日、森さんが優秀賞を受賞しました。）体育館壁面を彩る各教科の作品や成果物も見応えがありました。体育館全体が文化の香りに満たされた1日でした。

学級の仲間の団結であつたり、地域の皆さんの支えであつたり、会場で感動を共有することであつたり、「生月文化の日」を通して感じたのは、「つながり」のありがたさです。生月の文化や伝統、歴史、地域のコミュニケーションのつながりの中に生月中学校があるということです。これからも、つながりを大切にして、We Keep Going! 自信と誇りもて歩め。



